

妻の切うらやとひておがえど声をたまに泣けと小梅ハ胸をさうさ  
るふりその理ぞ最ぞ不便の者の心ヤと我を忘れてひりくと抱きつ  
き前後不覚ふ歎ノラゲヤまでも我とあくすのをひで、此役ゆき  
珠ス母人の御安否もなげぬにゆきをあわせ名告づきうらあく名の弊  
此子ダ一命かうる更その時の悲ノラムうらぶせ天下ふうとがほ  
かうめとなむたふ心を一つおきあんおががほれたりのびくとをもく我方  
のやうふるれをりうひ泣せー思きよとを涙をぬじてお笑ひ今ふも  
夫が飯来てえとがめて一大変とがるゝにあくふきをつうひこられよ  
聞てまづる野中ふ日とくさが難義のうへのなんざあくん泣ぎふ  
とく出ゆまねとあぐらをうとと聞つけとす涙拭ひまがう  
情ふれん詞をうけまわねどとあんおが妍う人のこもせど

うきをもあらふちのびがじとひけとが小梅の泣声ふかりてきこま  
しれことをひそ泣とも長居へ不為しくゆきとひつてた  
針箱のうちを探り掌小載て來り一粒り涙ふまだ露銀のやそ  
消るとあすぬおはまめの豆板と心の内ふりひつ紙ふ包を  
さし出へるがうすれどもううざし路銀のたゞふといひてあらひださ  
ねぐのちん情と一礼のびとあさめせひての報ふられをすみえ  
とぞ紙ふ封せし護札をとりひじことの子安觀音の安産の守  
ふひとそあくすみを小梅ハ折りの懷胎のおあらがその志のよ  
こじふあびてあらひじが順札へすうごとのびひてちやんじらなやを  
かう御縁もありびえうきぬてすうゆう支えもありかんといひてまう  
づとひじとくわそれ帶がゆきつをすけしてやんとちうづけそ

小つゑをたゞかげあげに櫛うてあくと髪をかきあげ身うちの塵  
とけ松ひきとそそせつりとまううある悲しも今一度顔よく  
えせとと口もんのれど心ふくもむれがむに憂ふひ夫とひあくね  
ど実の血筋名残ちげふ能とひうど一顧でうゆき声のあそびと  
父母のめぐもふ死小河寺仏のちうひなのり死ぬと順札を  
うひつひふつれゆくぬ小梅のオとそがだくとえおうけがやそ  
かげもええざとがああとときびてたれふとくめしため涙暖の  
堤をあそびてあくとあつそ理やうから折しりと四兵房へかぢげ  
立つて何う思案ふおちうな体小梅の有をあくとしちくちう金の  
え見へふぞ氣づくとまとまひけとがと四兵房へく梅の木波  
質へと金とのんとあら立ちとあうほしがづくても折園などを



うのうせんをびきけりがかり道場助まちさきゆきが方かたふさうてせめを四五日  
のぐとよとわしめ急まかふとれ買入くひりをとれぬれ明日中あさ小金こひんつさ  
ねのその方ほうへ賣うつふをと手づりの詞ことわふせんをわくゆりまつこま明後日造  
ひのぐとくもうが我われおみやで五十両よろとくふ金こひんの急まかふのふりをれ  
なく滝たき次たび即そくの遠とほ國くにふかじませばあくせまねくとくゑもは唯是  
唐琴とうぎんのおん家の滅亡めつぼに時節じせきあらう金こひんごくをおん家いえをうる  
こと无念むねんとも口惜くちぢりとづらひそくさむな我胸わがむねを推量すうりょうせよとそ男泣おとこなみ  
かたむにけりが小梅こくめいハ夫おとこの心こころをあひやり共ともきよふくわくちわくが我われ  
を質あらわと覺悟くわくそのひけんどうと思案おも案ふあらわごとやうんやと常まじひとへれ  
言ことふゆがさざり氣きとすあふまよ今夜よの胸むねをうつろびうつろび又一思案おも案  
とえゑとあ女の凌さう簡かん用ようふたりほどみあくぞやる時節じせきの

玉弔酒たまとうしゅで愁うれを払はてよせりて心こころの片白かたしろと買くて來きてまあせとし  
うち庵厨あんちやふりと棚たなの酒器しゅきをながみてのをぶしく走はりをしけ  
手て不持器ふじきとよくそせりが仏具ぶつぐの花瓶はなびんをすねだら平日ひのふたり誤まち  
一本花ひとはなのうることのひとす端はりある氣きさりうりあることと陶とうを取く  
ふたりづきつきを器きとせんやとゆふらりたゆふしが  
そとものもと心こころせとつゑとゆげと飛鳥とよの翼つばさをあひてうど  
のくもあひと四兵房よひやうの火ひ煙えん小身こみとよせ手てとゑゑにてう  
から胸むね不時ふとき打うたとげれ時とき疎影疎影横斜よこ水みず清淺暗香せいせんあんこう浮動ふどう月つき黃昏こう  
と賦ふと愛樹あいじゆの梅うめふ世よを避さいたひより似おなれども此こも一つのがれ  
里色さといろをよき香かへりを訪たずる人のあゆがゆ草くさの傾かたく細道ほそみち  
臘月ろうげつ夜よの目め当あてを修行者しゆぎやと繋つなれたが鉛なわおもじつあづやすあゆ

来ぬ与四兵房へとくふ物の音も耳ふづぎつづれの道すらかの  
刀を人手小渡しとて我忠義立だし五十両の金の才覚余ふかけて  
せぬがまよと我を忘れてひとり立ちとせぬひゞやまぶたと思  
案平の門口よりてゆき回國の修行者あるがゆゑにとて難義ふま  
ぐ一夜のやどりと御報謝ふ言ひたとよびれども与四兵房へ同ね  
おして答事と修行者へとゑたく又志シとよびるをせんきゆ  
えゆゑに御所望ちとて折あしくうそとみあひどとめざとて  
あり東の方へ二里ゆけだみよーの里とてよれとあう家のゆふとて  
タニモと詞をげなひけど修行者へやうとありばに  
のをとて宿の支のあひととのをとてあひじかうの一つとしやさん  
此ゆう不躋木六与四兵房とふ人のがくをとふみと四兵房同て

我本姓をあらへ不思義と立ちて鷺森与四兵房とやをい乃算がこ  
とあらが何用あらそなづねあひぞとて修行者これと國とひと  
とくおへ御身が与四兵房どのうちと物語なき子細あひとあバ  
のうちそくかんと年とせられしととみととととととととととととと  
をひづきとむうひづれ灯火をとせられしととととととととととと  
もあく笈をかば草鞋をままとととととととととととととととと  
まづ初對面の礼ととべきとひげり卒示なづれあくまハ泉州城の  
浪人栗野十郎左房門とふ者となづれあまかきよとふふととと  
兵房何とそれを知てあひりばとひさよとひけど修行者とく  
ひづらあひ理すと去年信州苗吹峠の雨の夜ふあんえの父鷺  
森數右房門をおりて上退す栗野十郎左房門とふへ則某が更

父をあざてちをしやん無念かわるひどやとひふふと四兵、馬、弓、劍  
目をくらうて后ひまくふをもりて手をゆき背后の一腰をともし  
盲糸の浮木優曇花のひくふあひ一攻さよ恨の刃ひひれ  
とよびうつむきと拔て軒つうとば十郎左馬門居なぐり劍をふ  
くらすやれまをあがくとひむとよと四兵馬とゑなげーく此場ふのそ  
を氣ふれせし武土の果ふゆ似合さず比奥者とひく又まうづ  
るをオとひゆてあがく刀と小屏風ふたうと志うと膝ふたうと  
來りて名告某ひをう比奥をもくべにうと懷中より短刀と取  
出一比奥ふあがくあじスセヤんとひく後をもくて腹ふくと  
つきなみは血とあうとあどがくさをうしげふ息がつとよぐ  
ひふと四兵馬の某が物語子細とくとあん間わどく唐琴

浦右馬門じゆう妻薄の花へ実へ某が同胞の妹やう某貧して母を養  
ふたうぎと藻の花深く愁ひ家代を以て母の老を安うとぞうと  
う妻奉母とのことうれ孝の為とめひたう某が名をあうとぞ  
とをうひざと遠國ふひうて古手屋三郎とく者をなうく縁とそ  
あれ浦右馬門じゆう妻とある母へあどかくおまうてゆきご忌明ふゆ  
ひくざくふ藻の花田鳥蓑文太とく者ふ殺せしと三郎うとう告  
越つるゑ某が信明ふりうと妹のむちた敵を葬と蓑文太う顔に  
見えうどとくとくいふれて彼をおとす妹の仇をむくろんとあがく  
信濃不逗留してそのゆへとたづねつう一女妹を葬てつる山寺ふ  
ゆうて仏堂とのとあく夜をふきてかこ道笛吹峠の坂下を通りう  
ふ田鳥蓑文太かへせがせとこゑうけられてむみのうとうとあ

者を折りも暗夜大雨をあひやかにわざねどもこれ蓑文太を疑  
ひ一天の午と申びて名告うけて唯一刀ふきりあせたる折りも斯波  
義将公の大軍か一來りけども先駁をあひたからずるゆゑもすくあ  
は立本牧まで翌日嘆とさけば蓑文太とふひへ數右房門どもそ  
浦右房門どものもその場みてやうとちふきりふひつは実否を知ら  
を知らずて人たゞセーラー一生の誤と後悔一腹かたずかして先んとせ  
レグまことに此役先して入たゞの裏あまうかまうと末代非道を  
かこきひとひそむべニラサヘ數右房門ゆ一子ありと同ベ志ぐく  
命とのべその人ふたうねあひ恨の双ふせよもて死そろく冥途の数右  
房門へつひ口けとるひも不一古御へゆうでなぞらふ旅路ふ赴く修  
行者不姿を粉して見るの住所を尋ねづれ本望とげて今日唯今  
ゆびをあひゆうれしまのちく同バ某蓑文太が助太刀と數右房門  
どのもちたるあんどどくとさきもあつては妹の仇の蓑文太ヲカヒ  
含せ恨むかたれ數右房門どのもちべた道理あみにやうとみて人  
たゞみすがれあること成推量あと蓑文太とちどく死をもへ残  
念かれども見るの爲めまじに主人の敵やられば我おてん見るの  
本意と失ふ道理と慮てその志をやうひひと余房へ今越後  
の国葡萄峠の谷うげ不捨りうともかくれ住よもや尋ねてちゑ  
がくども在所を告やまと某が死山の旅路のあき土産妹が恨むをじて  
まづれ某らびと名告てやうへんぶふ孝道をたてさせと冥途ふ  
ゆく數右房門どのみ跡急のつびとせん爲やうかくちぢれて昔と  
語りゆもひじけどもりとよりようすう武士の景運つまじして世ふ出

ぞ再家もおこをどしてかく威風の心のうち推量して毎四兵房と  
のをともと首むかで亡夫の灵を手向らかまつてとくにした息をつき  
ひひて首むかのびきと四兵房へふざくとつやう拳をゆらめさう人なが  
そあつるそれをあきらめを尋ねて仇をむくとちくに旅  
立心我と名告て其の孝をきむむ御心底さまとよゝあう人の果勇  
の義人をや窮鳥懐ふ入る時へ行人もこゑて死ふと自殺  
のうへ恨むと快く目をきみて成仏をしけらむとくにあく  
自殺せしのとせん水の手ふせらむが冥途ふりうて數右衛門が  
みゆりけむとくと首とおもとをもすみと与四兵房に益感  
五体不具ちる者へ成仏せしとさくべいをう首とおもと志のびんやあ  
うもあん水の心をゑどん晋の豫讓が衣を刺すをうみちくひ

あれえと此通りとひひツカとトロアしてさくの笈と水をふまつた  
とまうとあがあまあやしに多箇の内ふ呀とたゞぐ声あうて血ノ本  
あるとあどぞしろ小梅ハがくとてさきわどより門口ふたゞと内のみ  
とと窺居るが此体をえといそぐく走り入手をゆく笈のそびと  
ひしげてこひまきれあど順礼の男子手ふ小財布を持朱ふ漆  
アそまうびりとみ小梅ハ且放ら且悲泣泣く手負を今抱と何  
やゑ笈ふかくれあじとたゞゆゑ手負はせり、顔を擧かくす  
うへあさく余姫と名のうてだくさんあどおん詞のしぐ姫と  
ふうごひとみつれども敵ふつまづ縁あらが此おふ難義のゆ  
それともひかひてつうれどやまたあど守札封を用ひてスをたべと

ひさご小梅のそがへくとう出でてひづきとまふ守札あれあゞばして秋香  
信女某年某月某日没と記すよりそん母人の戒名をとつみ小梅へ又  
おどろにそん母人の世を本ゑひづう御臨終へいざありしとぞひけり  
長吉のとく父えへゆくへちねぞかり玉ひと苦ふもあふやえみやおりれ  
病ふ卧ゑひづが某心を尽べ看病の驗ありてやうく快とえふおりじき  
ゑふ折一も父上敷右房門どのと手ふくらはと同玉ひておどろとの  
あゑりみやまくちん病再発して俄ふもかくちうすふ今般の出日す母娘  
うと我オと敵同土ふからつ更と苦ふやく玉ひと四兵房どんへり  
口けと同玉ひ離別ゆくんへ必定かく氣づふしまよとそれのみと息  
ひきとろすでのゑひてこう死ゐふひーをやまく我オと順礼ふ  
とやして此国までおどりへ別儀みあゞど何とぞ与四兵房ど在ま

所とおづく母娘ふ對面と四兵房どり手ふかうて父えへのおん命ふう  
をきこつやと四兵房どり母娘の縁をつあん爲ぞひととくじげふあ  
ぐれば小梅ハ悲しき十倍ーそのけなげやう志聞がまくがと不便あり  
哉とりひこれとひ世眾の因果が親子とちう兄弟と生と來つる情事  
とくじれをく涙と血と相和して滻のごくふ流れりけしと四兵房も落  
涙一 小梅が実母泉州があつととめひて聞づが十郎左房門どのふつ  
きんきうとれつもあゞど九月と穿あつ支へあゞれにそれとあづば別ふ思  
案もあづばにふとを悔歎ば十郎左房門某とすもちは更も永の妻女が  
長吉の爲み泣ぐと同腹の娘とふ更の母の言残せりとを今日兒子ふ  
聞づがむじめぢうさんをど途中を名ひうみと兒子ふ逢何處を独旅  
て此辺ふきぬよととひづふ母の病死をつづきふ語りゆく旅か赴く

栗野十郎左衛門  
義の為ふ  
死を一子長吉  
孝の為ふ死を  
与四兵衛小梅  
夫婦悲歎ふ

せり

与四兵衛

あらの十郎左衛門



題梅花永  
裂後  
片水孝瞻碎天  
堂一鏡貞心伴  
佛國光闇餘微笑  
送早梅香  
山東京山

小梅

長吉



別意ふやくをかくの存念と心座のことを語りしゆゑその志へ過かされ  
ども四兵房どの義おつまた人とまくその子とキモ親の仇をよみをうけ  
てハあくびをよはまくをもるとも我オザリとふ子をきせそ命となを  
やもとめくと生をよぐて何武士道の立べをや某づ存念ハ与四兵房どの  
み出会いし自名告てキテ見覺悟をそありぞ汝の生残り我亡跡へ一遍の  
ゆくがれ  
念仏さりくの香花を手向て口をよとやしつる見子がやひのまくとて  
父え覺悟のうべ活残るべ所存ふやくどく死出三途のきた  
きせんどひととくとく自害とそつをゑまてあがくさばうふひつめ  
たるうれ是非も西こそも死ん覚悟をうが汝もともふ四兵房どの手  
ふやくさもわくが人の面前をそ自殺せよとまるとて兄弟敵同士  
の縁をうち呼小梅の身の為にといひ固せりがそれこそ望所とゆ世

ゆゑびく寢のうちふめしてそまで具一參りぬ兒子が念願そぞとてえ  
おの手ふやくじ更りしがおふどうと本望のゆうやうと四兵房どの  
わくづさりのへ子やうぢやとひてあと涙ふむせけりが人ふとくれて強  
きちうも手負うの長物語ふ息まれてうんとひつのけそくば  
と四兵房よりてか抱一父も父やう子も子やうたゞひ稀なる義士孝  
子惜むべ悲むべ父子ともふ深手なとばそもつまひぬ命やうと  
て益やうげば長吉の父のそぶふちひよりていふ父よと四兵房どのふたの  
おき我おとあとふ父うと出家とほ香花の料ふともあかんと野宿を  
ろなど銀難の旅の内も此金ふ手を付トと一錢ニ錢の情を乞てこれ  
をもだざきま來づれども用ゐむをくぬかひきよとひして財布の金を  
きげき  
投出せば十郎左衛門これととうひあくかひきとそふちよされたをど門

口ふをぞと用つて与四兵房どの主人のため不金のゆることあるより  
いふと四兵房ども此金をつきて又この因果話あり某前年絶海禪  
師とともに大明ふ渡り始て金魚の羨やうとこそその種を日本ふ携へ  
飯人としす禪師のゆゑひけへ此魚珍奇美丽とのども菓品ふあざむ  
食物ふあざむ只えうのもの玩物がりなげきつて支先益なりとあす詞を  
かひて持つて浦右房門どの所望ともあらず金二十両ふ賣たるがもの  
后川浦右房門どの其奥と主君ふさげの恩賞にて鎬藤四郎の刀  
と玉刀アツヒキと表右房門どの金魚の餌をすとむと妹が支えを同  
出されおひく浦右房門どの妻とやり非命不死して怨魂金魚のみ  
うすまた兒子ふさげ母の病をとくりん爲仏神を祈て刀をまよひ  
とを井の水とくらむと金魚を得て金七十両ふえつはしもの金

則是すり二十両ハ母の病用葬具の費仏事の爲み用ひて今五十両残  
るは是まさに藻の花ガ靈魂兒子が孝心を感トガの奥ふつみて此金を要  
たる疑はせよと爲ひこれと云ふふを金魚ふ因果ある今又す禪  
師のとくめふひへやる因果をとくあひ見てゆゑをひめさんわど用ひ  
矛刀の爲不金のへ更あとは察するつかの鎬藤四郎の刀やうじ何と云此  
金をもの用不立をされし金魚の爲不玉にし刀を金魚の價を買ひ  
どもこと因果を滅る道理ナウ弊敵の手よりうす金と忌まひあふ  
まよそとあれば与四兵房押戴復より出る金やれハ正是仏の肌の紫麻金  
色此世を成仏のあはせあり我急難を救ひふ親子の大悲悲觀世音枯  
たる梅の某由蘇甦たりそちぢり此方のへ用不金の数の丁ど合ひ不思議  
かうとおさもひ小梅ハ長吉ふ抱つきとをやどまど不我更をひひらて

來しものと名のとて久世その時へ薦堂法師の石堂をおひじたう古もぐ  
あつてゐとあらきて生たるうちもせぎりごと兄弟の名もありやう平ふ  
今まを顔もスを今日遇てけふ死ゆくといふやう宿世の惡報をやといひ  
て涙の限て泣尽と長吉与四兵房ふむうひ親子一所不相果て敵の血筋  
を乞うべく妍うふがりきほ何とぞやうとう箇千代もつれそひて玉  
ノ手を合て拜むる只く妍うの更たのくいとひてまき父のま  
みちひよりりと此世ふそもあく更山をどく冥途へん供と手ふそが  
ば十郎左衛門手をとて親子へ一世のちぎりとつても二河白道の長の旅  
かきど我とえ忘れあ顔をよくみておけよことひく親子たゞひの顔え  
合せ共みちづく断末摩長吉の白目ふぢり歯をかみあすし刃をもぐて  
已みゆう死苦八苦小梅ハ志と抱つきりふ死ぬるう名残ぎや苦も  
き

あんが念佛ととどめうとも不絶入まちうり十郎左衛門ハめれが苦痛  
をえまちうびと長吉ふと色きうさをあんゆく方ハ西やりぞめううと我  
をえ失ふと四兵房どのうく来ざけふとておきし野中のかられ井せみて  
親子の屍を一所かごと玉ひれじとひて短刀ととて手ゆりを紀つ吹  
のふとをかまうてう伏ゆそすなうとけ長吉つぶ小梅が膝と枕に  
ておちうと親子一時の落余ふ夫婦者ハ泣たれとておがくおがまう  
折しもあれ空小阪雁の唐櫓おと音も弘誓の船りとひ与四兵房ゆうく  
起上りて軒端の梅の枝を折來といふ小梅悔てかうぬ歎をあてこれと  
えよ連枝の片くの折てもあとふ香と残毛孝子の義名はくちぎりぞ花  
の香もあ此枝を香花ふとて手向よとをあひとば小梅涙き手ふこれと  
うておや子の死ふ手向つてこじつても朝霜と消てそらかくちる人ふ

何の恨う残るべれ南无鷲靈頤證仙果菩提南無阿弥陀佛と夫婦より  
ともとありふる折一も餘寒よしむらふさゆ鐘の声諸行无常とつげつらも小田  
の蛙あわも声うれて覓まつひの水もむせうてひとを衰あせをそふりと四兵房よへい  
ちや曉あらかふちうつるべよ敵き蓑文太ふみ在所あそううへ於豫よ志おに我わ明日  
急あすふ旅立たびだちて滝次郎たきじろうの尋ねあひ助すけ太刀たけておせやんともの賣めふの  
刀とを切り目めふりと安堵あんどさせやしたしそちそ此金こひを持もて援助さいじょが方かたふゆさ  
を買くとりて来きまく我わのおや子この亡骸なきがらを遺言いごんふまを野中のなかの井いふ葬さま  
かん修行者しゆぎょうしゃの此こどぞちち人ひと目めと志おのぶ不究竟ふくきようの旅裝束りょくそうそくあらわあらわが我わこれ  
を用もちひりうどうどそちそ親人おやじんふお下おとんとひひ布子ふすをこそ出だせよ此人ひと  
着きせとやれよ冥途めいとと親人おやじんふあふとも人ひとたぐのあらんとよかよぞぞ小  
梅こめいとままくらば与よ四兵房よへいそれと着きせとゆる小梅こめいハ長吉ながよしが屍おがみを抱いだか  
サさと聞きひひかかややがるひひと右うと左さふつつれゆゆと  
○今谷中三崎の内小野中井の旧跡きゆせきあり一名柏木の井かしのいとふは十郎左房さぶろう門もん本  
姓おを柏木かしの木といひやまやま后あとふ里さと入いゆゆ父子ふしの義心孝志ぎしんこうしきを感かんとてお井いののき  
クくスすツつの塚づかとつさ檜樹ひじゆを裁さて不斷ふぶんの供花くわと

かひぞきを野中の清水瘦け鬼と見ゆを跡をたれ人の傳  
とふ歎を卒都婆ふ母つをもほみたそげと聞ぬされどもその實舌へ  
たしらやくとど

をその時小梅刀を得て、う首丁どと四兵房葬をもそ立り、う刀をうちとを  
おの刀の手ふりしは良吉が死後の手柄刀の手ふの手を敵のあり、光明院  
ば唐琴の御家再興ハ面前なり、もまよひとひとひとひとひとひと  
あらむるえす不前ふえーとひ品うらして全き寶物をもひだ大ふをどうにまこと  
研屋め、惡意あて女とあたぐり寶物をもひて金とりしき心せくす大夏  
の使女をやりしは我一生の誤なりとひが小梅ハ唯もそれなりむうを  
よしと  
与四兵房ハ齒ごとほ彼奴を捕て孔明一真の力をもと來らんとひと  
て飛がどくふ走り行小梅も心をさむが跡ふぶたてをせゆをねらふ是  
がの力の因果のまく滅せまう所をもべ

○此末棟が悪灵蓑文太ふとひつきて恨をむくす蔓蓑文太癱病をやそ  
無限の苦とどうも更小梅出産の更玉骨刀冰姿鏡の靈験あうまえと  
四兵房が家の梅奇特ある更矢四兵房夫婦忠孝貞節の功德あ  
滝次郎小力を合せてつひふ蓑文太をも更絶海禪師の教化もありて藻  
の花の靈成仏得脱の更滝次郎与四兵房夫婦忠孝貞節の功德あ  
て立身出世の更葛飾郡小梅村梅堀の来由のたゞひ後編三冊ふ記  
て詳かり發児の時を待得てそびし

梅花氷裂下冊終

## 梅花氷裂後編 三冊 近刻

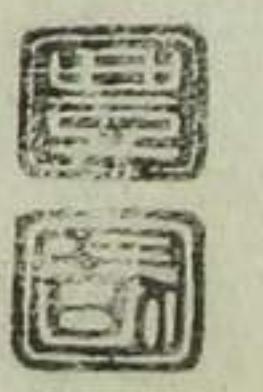
編者

醒醒齋山東京傳



畫人

一陽齋歌川豊國



横山町二丁目大坂屋半藏板

朱子讀書記

清人覺世道人傳方 椿壽齋老人製 一包壹支參

○氣えどつづきものぢがえどよまと。心臓のまよそんふす。○まのさざりくわづる  
す。○坐どつまそようした人用ひ。○つねに辛勞ちあくもん人老若男女不ふか  
ら。○おなじくおなじくあり。○中もろまく。病氣の人のつねふたぐりがく下  
。○氣えのあひをへつて腹痛のたぐひ。一粒を奇功ある。神のごとく。

賣弘所

江戸

山東京傳烟草入店

